

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 8 日現在

機関番号：32404

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009 年度 ～ 2011 年度

課題番号：21520547

研究課題名（和文） 日本語発話解釈の難しさに関する研究—言いさし発話に注目して—

研究課題名（英文） The Difficulties in Using and Understanding Sentence-final Ellipses, *Iisashi*, in Free Conversations

研究代表者

荻原 稚佳子 (OGIWARA CHIKAKO)

明海大学・外国語学部・講師

研究者番号：10458482

研究成果の概要（和文）：本研究では、中途終了文である言いさしが日本語コミュニケーションにおいてどのように使用されているかを調べることで、その発話と解釈の難しさについて考察した。各 18 組の日本語、中国語、韓国語の母語話者同士、および、9 組の英語母語話者同士の自由会話におけるターン末の言いさし発話について、その使用頻度、形態、表現を詳細に調査・比較することで、言いさし使用の難しさと解釈の難しさについて考察した。

その結果、母語にかかわらずすべての言語グループにおいて全ターン末の 40% 以上で言いさしが使用され、言いさしは、日本人だけに特有なものではなく日本語コミュニケーションでの特徴であることがわかった。形態別では、質問・付加・倒置などの解釈が容易な形式的言いさしは、各母語グループにおいて全言いさしの 19~27% しか使用されておらず、日本語非母語話者にとっては、付加や倒置による言いさしは解釈は容易でも使用に難しさがあることや、名詞止めや助詞終わりは使用が容易な言いさしだが、テ形終わりや副詞終わりなどは難しいことなどがわかった。

研究成果の概要（英文）：This paper examines the difficulties in using and understanding sentence-final ellipses, *Iisashi*, in 18 free conversations between native Japanese speakers(JNS), native Chinese speakers(CNS), and native Korean speakers (KNS) respectively, plus 9 free conversations between native English speakers(ENS). The purpose of the research is to evaluate the influence of *Iisashi* on the interpretations and usages in the conversations. The research focuses on ① how often *Iisashi* are used in the conversations, ② which expressions are used as *Iisashi*, ③ which expressive functions of *Iisashi* are used in the conversations, ④ how use of *Iisashi* are related with contexts between speakers, and ⑤ how these results are different from the results of the same study between native Japanese speakers.

In the study, more than 40% of all turns finish with *Iisashi* in all language groups. Among those, 19~27% out of all *Iisashi* are external *Iisashi* which contains expressive functions, such as questions, additions, and inversions. These are relatively easy to interpret. But, *Iisashi* which contains expressive functions, such as additions, and inversions is difficult to use for CNS, KNS and ENS.

Regarding the expressions of *Iisashi*, it ends sentences with nouns, particles, adverbs, and te-forms. *Iisashi* which ends sentences with nouns is easy to interpret and use. But, *Iisashi* which ends sentences with te-forms is difficult to use, but easy to comprehend.

These results reveal that CNS, KNS and ENS use and comprehend most of

Iisashi in the same way as native Japanese speakers do. However, CNS, KNS and ENS have difficulty in replacing the objective case with predicates or adverbs with predicates.

It shows CNS, KNS and ENS have the pragmatic ability to comprehend *Iisashi* in Japanese conversations. Moreover, the characteristics of the Japanese language make possible to comprehend these *Iisashi*.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：語用論・言いさし・発話解釈・日本語教育・談話分析・コミュニケーション

1. 研究開始当初の背景

日本人同士のコミュニケーションには省略が多いという特徴がある。省略の中には最後まで文を完結させない中途終了文があり、それを「言いさし」と呼んでいる。これまで、言いさしが多用されるのは、互いの共有知識により推測が可能であるからであり、高コンテクスト文化である日本人同士であるからだとされてきた。だが、近年、その説明に対する疑問も投げかけられている(荻原2010)。また、言いさしをはじめとする省略の多さが日本語コミュニケーションの理解を難しくしているとされているが、言いさしの多用が発話解釈の難しさを生んでいるかどうかについての調査は十分に行われておらず、特に、日本語非母語話者による言いさし使用についての研究は非常に少ないという現状がある。

2. 研究の目的

本研究は、日本語コミュニケーションにおける発話と解釈の難しさがどこにあるのかを解明するために、発話解釈を難しくしているとされる言いさし発話について、中国語母語話者・韓国語母語話者・英語母語話者の日本語での自由会話における言いさし使用の実態を詳細に調査し、日本語母語話者同士の言いさし使用の実態

と比較・考察するものである。

各言語での自然会話における「言いさし」発話の出現や出現の仕方を日本語コミュニケーションでの出現状況や出現に対する対応の仕方と比較することでも、その難しさについて考察していく。

3. 研究の方法

(1) 日本語母語話者および、中国語・韓国語・英語の母語話者同士による各母語および日本語による自然会話を収集する。各母語話者について、以下のような組み合わせの1対1の自然会話(各組、各言語ごと15分)を収集する。中国語と韓国語の母語話者は、友人同士、および年齢差のある上下関係ペアの男性同士ペア3組、男女ペア3組、女性同士ペア3組の各18組36人に対し調査を行い、英語母語話者に対しては男性同士ペア3組、男女ペア3組、女性同士ペア3組の計9組18人の被験者の自由会話を収集した。

なお、日本語非母語話者については、日本語能力がOPI中級一上レベル以上の被験者にした。

(2) 収集したインタビューテープの文字起こしを行った。文字起こしは、研究協力者に依頼した。

(3) 日本語以外の会話については、各種ペアごとに日本語会話において最も平均的な言いさし使用を行ったペアを選び出し、母語による文字おこしの後に、直訳翻訳を行った。直訳翻訳は、研究協力者に依頼した。

(4) 文字おこし原稿をもとに、ターン末の言いさし発話を抽出し、その頻度・形態・表現について分析を行った。

(5) 分析結果を比較することで、各母語話者別の日本語コミュニケーションにおける言いさし発話の使用と解釈の難しさ・易しさについて考察した。

(6) 得られた知見から、日本語教育におけるコミュニケーション教育の際に求められることについて提言を行った。

4. 研究成果

(1) 日本語会話での言いさし使用頻度について

研究の結果、言いさし使用の頻度は、どの母語話者においても全ターンの40%以上が言いさしによって終わっていることが分かった。しかも、頻度では日本語母語話者が最も低いことが明らかになった(図1)。

つまり、日本語非母語話者のほうが日本語会話においては多くの言いさしを使用していることになる。

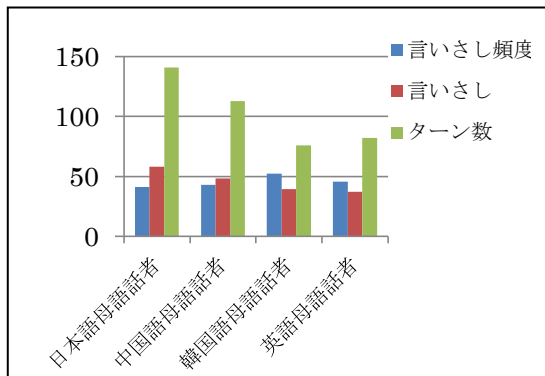


図1. 各母語話者別言いさし頻度

なお、全ターン数は日本語母語話者が最も多かった。その点について、母語での会話においても日本語母語話者のターン数より他の母語話者のほうが少なかったことから、1ターンの長さが日本語母語話者が短いことが分かる。それに加え、日本語による会話の場合、母語話者と非母語話者では話すスピードが異なり、母語話者のほうが同時刻内に多くのターンが生まれると考えられる。

また、自由会話を行った話者間の言いさし使

用の相関関係については、すべての母語話者間において相関関係が認められ ($R = 0.6442 \sim 0.8501$)、使用頻度は個人差もあるが、会話する相手に影響を受けたり、影響を与えたりしていることがわかった。

(2) 属性別使用頻度について

属性別の言いさし使用頻度について比較してみると、性別では、日本語母語話者、中国語母語話者、英語母語話者の場合は、女性ペアが最も言いさしを多く使用していた。韓国語母語話者だけが、男性ペアが最も多く言いさしを使用していた。

友人ペアと上下関係ペアについては、英語母語話者以外で調査したが、図2のとおり、日本語母語話者も韓国語母語話者も中国語母語話者も、初対面の年齢差ペアのほうが言いさし使用の頻度が高かった。

これまで、共有知識があるから言いさしなどの省略が多く使用されると言われてきたが、本研究の結果では、共有知識の少ない者同士の会話のほうが言いさしは多用されており、共有知識の有無が言いさし使用の頻度には関係がないことがわかった。

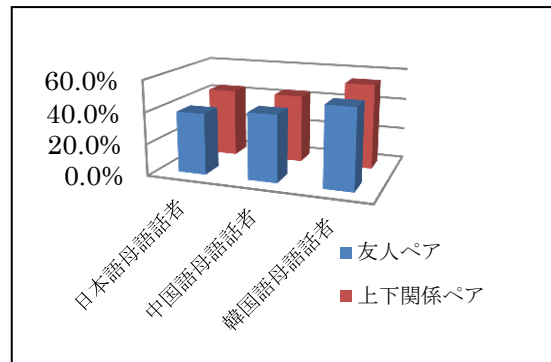


図2. 親疎による属性別言いさし頻度

(3) 言いさしの形態について

言いさしの形態について調査し、言いさしにより質問をしている場合、倒置をして言いさしになってしまった場合、完全文に副詞などを付加することにより言いさしになってしまった場合は、慣習的に中途終了することが多いことや結果的に言いさしになっていることから、形式的言いさしとした。

たとえば、質問の場合、上昇イントネーションや疑問詞を使用することで質問であることが容易にわかる。倒置は、言いさしになっている句とその直前の句を入れ替えることで完全文となる。付加についても、完全文で意味内容はわかっており、「たぶん」「ほんとに」などの副詞などを追加することで、確信度合いなどを強調している。

このような形式的な言いさしは、その他の述部が語られていない実質的な言いさしに比べて

解釈が容易であると考えられることから、その使用について調査・比較した。

その結果は表1のとおりである。

日本語母語話者に比べて、非母語話者はすべての母語グループで質問を多く使用していた。だが、倒置や付加については使用が非常に少なく、半分、またはそれ以下の使用であった。

特に、中国語話者は質問を多用している点で特徴的であった。

表1. 各母語別言いさし形態の使用頻度

	質問	倒置	付加	その他
日本語	12%	7%	9%	72%
中国語	17%	3%	3%	77%
韓国語	15%	4%	5%	76%
英語	14%	1%	4%	81%

つまり、日本語非母語話者にとっては、解釈の負担が少ない形式的な言いさしであっても、倒置や付加については使用は難しいということを示している。

(4) 言いさし表現について

各母語話者別に、言いさしが名詞止めになっているもの、助詞終わりになっているもの、副詞終わりになっているもの、テ形で終わっているもの、その他の5種に分けて使用頻度を調査したところ、図3のような結果となった。

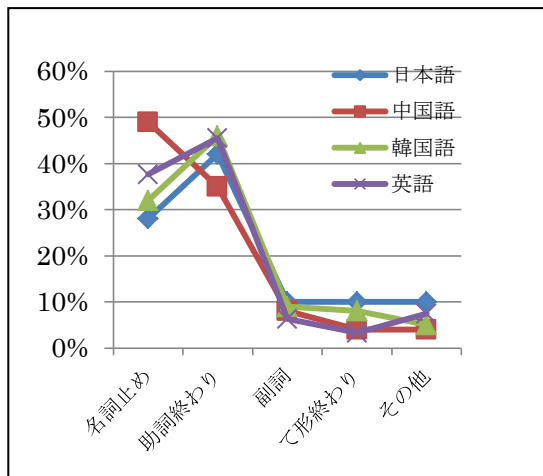


図3. 各母語話別言いさし表現の使用頻度

図3のとおり、日本語母語話者は助詞終わりの言いさしが最も多く42%で、名詞止めが28%、副詞終わりとテ形終わりとその他がそれぞれ10%であった。

この使用傾向に韓国語母語話者と英語母語話者は類似していることがわかったが、助詞終わりと名詞止めの使用頻度が高く、それ以外の使用頻度は低くなっている。

中国語母語話者だけは、使用傾向が異なり、名詞止めが49%とかなり多く、助詞終わりの使

用は35%しかなかった。ただ、副詞終わりとテ形終わり、その他については、他の非母語話者同様に使用頻度が低かった。

この傾向については、副詞終わりが付加の形態で使用されることが多いことから、最後に副詞をつけ加えるような話し方は、日本語非母語話者にとっては難しいことが分かる。

また、テ形終わりについては、テ形に続く部分についての解釈は、様々な表現・内容が続く可能性があり、難しいものだと言える。テ形終わりは、解釈についても、使用についても、日本語非母語話者にとって難しいものとなっていることがわかった。

(5) 言いさし表現の内訳について

言いさし表現の使用について、母語別に特徴的であった点として、中国語母語話者の名詞止めの多用と韓国語母語話者と英語母語話者の助詞終わりが挙げられる。

中国語母語話者の場合、名詞止めがどのような機能で使用されているかについて内訳を見ると、図4のとおり、質問とその答え、語彙の繰り返しなどが多く使用されており、はっきりわからない語彙を質問・応答したり、確認したりする際に、名詞止めが多用されていたことが分かった。つまり、語彙確認のストラテジーとして名詞止めが定着していると言える。

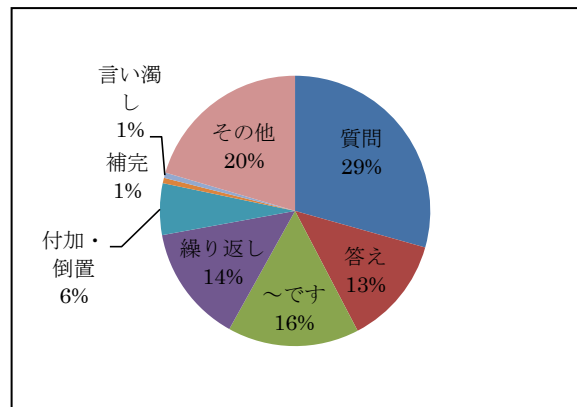


図4. 中国語母語話者の名詞止めの内訳

また、韓国語母語話者と英語母語話者については、助詞終わりの多用が特徴として見られたが、その内訳は、異なるものであった。

英語母語話者の内訳は、日本語母語話者と非常に類似しており、「を」「が」「に」「は」「も」などの格・係助詞が約5割を占め、その後、「けど・が」「から」「とか」「って」の順に多く使用され、日本語母語話者(図5)とほぼ同頻度で使用されていた。

それに対して、韓国語母語話者の内訳(図6)は日本語母語話者とは異なる点があり、格・係り助詞が50%と最も多いが、それに続いて「から」の使用が17%あり、日本語母語話者の12%よ

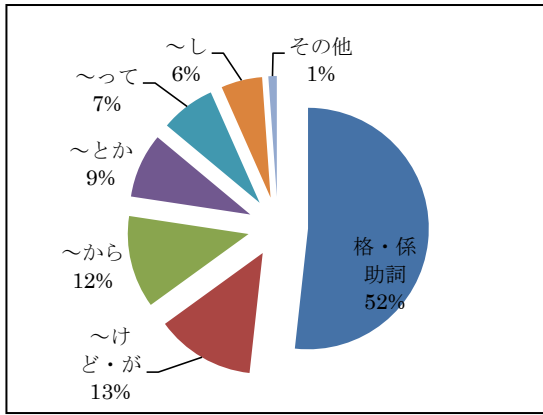


図5. 日本語母語話者の助詞終わりの内訳

り5%多かった。それに対して、「けど・が」は3番目に多い使用で11%に留まった(日本語母語話者は13%)。

「から」の使用をさらに詳しく調べると、理由や起点を表す「から」は17%中約3%であり、ほとんどは理由を表さない「から」であり、しかも、白川(2009)において言い尽くしの言いさしと呼ばれているものが多数を占めていることがわかった。つまり、特に「から」をつけなくてもわかる文に「から」を付加しているのである。

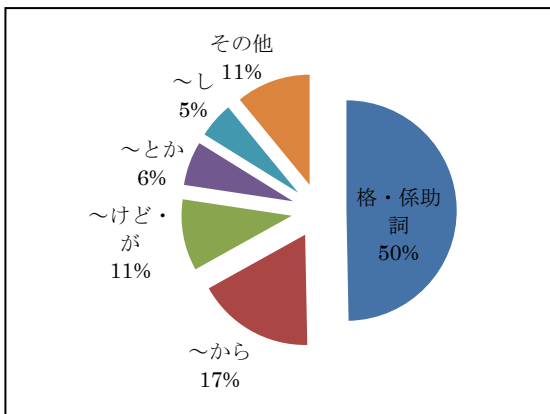


図6. 韓国語母語話者の助詞終わりの内訳

このようなカラ節による言いさしの多用は、中国語母語話者にもみられた現象であり、「けど・が」を多く使用する日本語母語話者と英語母語話者に対して、中国語母語話者と韓国語母語話者は「から」を多用しているのである。

この不必要とも言える「から」の付加により、発話が一見ネイティブのような自然さを生んでいることから、自然さを出すストラテジーとして中国語母語話者と韓国語母語話者はカラ節による言いさしを多く使用されていると考えられる。

(6) 母語による会話での言いさし使用について
母語による会話での言いさし使用については、中国語母語話者と韓国語母語話者については属性別に6組の、英語母語話者については性別ごとに3組の会話データから分析をしたが、中国語話者の場合は6.5%、英語母語話者の場合は16.8%、韓国語母語話者の場合は32.3%のターン末において言いさしが出現した。

日本語による会話での言いさし出現とは明らかな相関関係は認められなかったが、韓国語母語話者の言いさし使用の多さや、中国語母語話者の名詞どめ使用などが目立ち、母語での言いさし使用のストラテジーが、日本語コミュニケーションにおいても発揮されていることが考えられる。

(7) 日本語教育への提言

以上の結果を受け、日本語教育において言いさし使用をストラテジーの一種としてとらえ、適切な使用と解釈を目指した指導を取り入れるべきではないかと考える。

日本人と同様の話し方を強制するのではなく、日本語非母語話者がすでに言いさしを多用しているという現実を受け止め、言いさしの使用や解釈において誤解を生んだり、誤認識が起きないような指導が行われるべきであると考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

① 荻原稚佳子、日本語自由会話における「言いさし」使用と解釈の難しさ—中国語母語話者の場合—、明海大学外国語学部論集、査読有、24巻、2012、pp17-33

② 荻原稚佳子、日本語母語話者による自由会話における「言いさし」の使用と解釈、明海大学外国語学部論集、査読有、23巻、2011、pp1-17

〔学会発表〕(計2件)

① 荻原稚佳子、自由会話における日中韓国語母語話者の言いさし使用の比較研究、2012年日本語教育国際研究大会、日本語教育学会、2012年8月19日、愛知県

② 荻原稚佳子、日本語コミュニケーションにおける韓国語母語話者の言いさし使用—日本語母語話者との比較から—、「話し言葉の言語学」第3回、2012年1月7日、神奈川県

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

荻原 稚佳子 (OGIWARA CHIKAKO)
明海大学・外国語学部・講師
研究者番号：10458482

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：